

トーマス・マンの『大公殿下』について

鎌 田 忠 男

トーマス・マンは、1903年12月5日付ヴァルター・オーピッツ宛の手紙に、「私は、芸術家は君主と同様に象徴的存在・代表的存在という性格を帯びている、と言いたいです。——そして、ごらんなさい！このPathosには私がいつか書くつもりでいる全く風変りな事柄への萌芽、君主小説への萌芽、『トーニオ・クレーガー』と対になるものへの萌芽があり、この対となる作品は『大公殿下』というタイトルを帯びることになります。¹⁾」と書いている。トーマス・マンは1904年10月3日にカタリーナ・プリングスハイム（愛称カーチャ）と婚約し、翌年1月に結婚するが、『大公殿下』は1905年から書き始められ、完成したのは1909年の2月である。

トーマス・マンは、一体どこから、この生まれつき片手が不具の王子を主人公とした物語を扱うことを思いついたのであろうか。「この長編小説の成立の雰囲気はドイツ帝国のそれであり、そしてたやすく認められることであるが、ヴィルヘルム二世時代の様相と小道具が物語の道具立ての中へ入り混っている²⁾」と作者は述べているが、「あくまで作り上げられた書物³⁾」ということも言っているので、舞台はヴィルヘルム二世時代のあつた大公国、となつてはいても、物語の展開は、ほとんど作者によつて案出されたものらしい。ただし、急に思いついて、この作品に着手したのではなく、トーマス・マンは前々から、君主には芸術家というものが象徴的に現われている、とみていた。それは冒頭に引用した手紙からも察しられることであるが、すでに『トーニオ・クレーガー』（1903年2月）に、トーニオが友だちのリザヴェータ・イヴァーノヴナにむかつて、平服を着て群集

の中を歩いている君主の表情に芸術家の表情と似たものがある、と言う個所が見られる⁴⁾。このことから、『大公殿下』は芸術家を君主におきかえた比喩的な作品であって、芸術家問題をテーマとした小説である、という受け取り方もできるわけであるが、ここでは、そのような枠に嵌めて問題を一般化することを避け、トーマス・マンという一個の人間の問題として考察する。芸術家と君主とを類似したものとみなしていたということは、それだけ文学を天職と感じていたマン自身の個人的な問題が提起され、内面が吐露されうることにもなるわけであるから。

作者自身も後に述べていることであるが、この作品はメルヒェン風であり、喜劇的な雰囲気をももっている。滑稽さの陰にときおり悲惨さが窺われるが、物語全体の印象としては、概して深刻ではない。むしろ、語り手である年代記編纂者によって淡々と語られていく。以前に書かれた諸作品に比べると、珍らしく明るい雰囲気が漂っていて、作者が余裕をもち、楽しみながら筆を進めた様子をも窺わせる。しかし、物語の展開がメルヒェン風であり、とりわけ緊張を孕むこともなく、幸福な結末に至るということは、読む人に単なる娯楽小説として受け取られることにもなりかねない。じじつ、作者の言によれば、『大公殿下』が世に顕われた当初、ドイツの批評家たちは、「家庭新聞に向いた」筋書きである、と酷評したらしい⁵⁾。そのせいもあってのことか、後にトーマス・マン自身も、この作品について弁解やら、説明やらしており、そこには後悔じみた言葉すら混っている。たしかに、『ブデンブローク家の人々』の成功、生活の安定、そして恋愛の成就、という作者自身の幸福な時期に書きあげられたことが、滑稽で余裕のある描写、およびハッピー・エンドというところに出ているのではあろう。後半の部分に冗長の嫌いがあるのは否めない。結末も表面的には安易な解決方法ととられる。しかし、自作についての種々の弁明的発言の中に、「私の内部には、自分について物語りさえすればよい、

という信念が生きている。(中略) そしてもしもこの信念がなかったならば、私は生産の労を放棄するかもしれない。(中略) 私は、今回もまた、自分の生活について物語った。⁶⁾」と述べている個所がある。これは『大公殿下』発表後まもない時の発言なので(1910年)、当時のトーマス・マンの気持を探る上でよりよい参考となる。それは、この作品が表面上かみやすい小説とみえるかもしれないが、書き手の態度は存外まじめだったことを意味するのであって、じじつ、それが人間性の問題にたいする作者の真摯な態度として、この作品の中に現われている。私は、この人間性の問題にたいするトーマス・マンの態度に焦点をあてて、それが登場人物にどのように投影されているかを見ていきたいと思う。

話は少し前後するが、あらためて『大公殿下』執筆前後のトーマス・マンの心理状態を探りながら、さらに、この作品に即して、考察を加えることにする。そうすることによって、作品発表後の種々の弁明的発言による解釈上の混乱を避けることができ、同時に、この表面的には軽くみえる作品がもつ、作者の内面との関わり合いも明らかになると思われる。

1901年に二巻本で出版された『ブデンプロック家の人々』が世間の好評を博し、トーマス・マンは作家として立つことに自信を得た。1903年にミュンヘンの社交界に紹介され、プリングスハイム家と近づきになったトーマス・マンは、この一家の頭がよくて美しい娘カーチャに思いをかけるようになり、1904年以降、カーチャに宛てて求愛の手紙を書いている。「私に付着している代表的・人工的なものからの治癒、私の個人的・人間的な部分への無邪気な信頼の欠乏からの治癒が私にとってはひとつのことによって可能となるのです。つまり幸福によって。利口で、愛らしくて、親切で、人に好かれる小さな王妃であるあなたによってなのです!…

(中略) 私の妻になって下さい。そしてかの《ぎこちなさなどのようなもの》によって惑わされたりしないで下さい!⁷⁾」(1904年6月初め)(下線の部分、原文はイタリック体、以下の引用文も同様。) トーニオ・クレー

ガーには、芸術家であるためには人間的な感情を捨てなければならない、
 という考えがあった。しかし、それにもかかわらず、「平凡な市民生活」
 への軽蔑の入り混った憧憬を捨て去ることができない。トーニオ・クレ-
 ガーは二律背反に苦しんだ。そしてこの二律背反による自己分裂を免れる
 ために、報われることのない愛に甘んじた。これによって自己分裂に至ら
 ず、芸術家としてのひとつの道を見出しもしたが、まだ感傷的な気分を多
 分に含んだ愛に留まっていた。「私はこれまでいつも、愛する時には同時
 に軽蔑もしていた。憧憬と軽蔑との混合、イローニッシュな愛がそもそ
 の感情領域だった。トーニオ・クレ-ガーは》生《を愛したのだった。つま
 青い眼をした凡庸さを、悲しい気持で、嘲笑的にそして希望もなく。⁸⁾」
 (カーチャ宛、1904年8月末) 当時、トーマス・マン自身にも、市民的な
 愛による幸福、現実の幸福はあくまで憧れにすぎない、という諦めに似た
 ものがあったのであろうか。たとえそれがあったとしても、心の内には自
 分の支えとなってくれる人、生涯の伴侶を切に求める気持が潜んでいたこ
 とは疑いえない。それは人間の感情として当然のことである。次の言葉か
 ら、諦めと願望とが交錯しているトーマス・マンの心中が窺い知られる。
 「とりわけ人好きがするわけでなく、気まぐれな、自虐的な、ものを信じ
 ない、邪推深いと感じやすい、そして共感をまったく異常なほど渴望して
 いるこの人間に承諾を与えてくれる人はどこにいますか——？ (中略) 好
 意と信頼から、しっかりと私の味方になってくれる [人は]？ このような
 人はどこにいますか?!? ——深い静寂。⁹⁾」(パウル・エーレンベルク宛、
 1902年1月28日) しかしトーマス・マンは、カーチャと知り合い、愛情を感
 じ始めると、諦めの気持は消え、希望を見出し、孤独な自分にも現実の幸福
 が可能である、という心境になった。いや、可能性を見出した、という分
 別めいた心境ではなく、そこにしか自分の幸福はない、とまでに思い詰め
 た気持になってしまう。「私は毎夜彼女の夢を見る、そしてすっかり傷つ

いた心で目をさます。私は、彼女について、諦めるには余りに多くのことを経験した。死は、彼女なしで生きていくことよりもずっと簡単な諦めである、と私には思える¹⁰⁾」(クルト・マルテンス宛、1904年7月14日)

トーマス・マンは、『大公殿下』以前の作品において、孤独な状況におかれた人間(芸術家)をテーマにした。この状態に宿命的なものという感じを懐いていたらしい。たとえば自伝的要素を多分に含む『トーニオ・クレージャー』において、「文学は要するに決して職業ではなく、呪いなのです。(中略)あなたを人間たちから分け隔てるイロニー、不信、敵対、認識、感情の奈落がますます深く口を開きます。(中略)そしてそれ以後もはやどんな意志の疎通もありません。何という運命なのでしょう!¹¹⁾」とトーニオはリザヴェータに語っている。生まれつき片手が不具、という不利な条件を背負い、君主の子という特殊な立場におかれているため、幼い時から、儀礼的・形式的な生活を余儀なくされ、他の現実的な日常生活を送っている人々との心の交流が許されないクラウス・ハインリヒにも、このことは当て嵌まる。しかしクラウスは、この孤独で冷たい世界に甘んじることができない。あるときは、衝動に任せて、皆の笑物になる、という苦い体験をし、寄宿学校で知り合った若い助教員ラウル・ユーパーバインに諭されても、心の触れ合いを求める人間の本能に根ざした素朴な感情を抑えることができない。そして、莫大な富と、有色人種の血が混っているということで、クラウス同様、孤独な立場におかれているインマを見かけ、心を動かされてしまうと、インマに辛辣な言葉を浴びせられ、傷つき、打ちのめされながらも、しゃにむに彼女の許に通い続け、善良な策略家クノーベルスドルフ男爵の助けを借りはするが、ついにインマとの結婚に漕ぎつけるのである。クラウスが幸福を獲得するまでの過程には、他人との共感に飢え、カーチャと出会って、やっと希望を見出した当時のトーマス・マンの心中がじゅうぶん反映されている。カーチャとの間に現実の

幸福を見出した、と思ったからこそ、トーニオ・クレーガーの到達したやや感傷的な幸福とは異なった現実的な幸福をクラウスに掴ませたのであろう。

ところで、主人公クラウス・ハインリヒは幸福を掴むが、ある事件がこの幸福な結末に一抹の暗い影を落としている。それは、ユーバーバインが、同僚との些細なもめ事の後、クラウスとインマの婚約の日に、みすぼらしい自分の部屋でピストル自殺をしてしまったことである。この自殺は、それが主人公の幸福と著しい対照をなしているため、また作者が後に『非政治的人間の省察』で、「物語の案出者たちは、ある登場人物を破滅させ、他方ある登場人物を幸福にすることによって、前者にたいする個人的な共感を表出し、これと反対に後者にたいしては陽気な軽蔑を表出することを好むのである…¹²⁾」と述べていることでもあり、見逃すわけにはいかない重要な事件である。

ユーバーバインは、「白い夫人」の善良で高潔な夫とその子供たちのために、彼女を諦め、永久に「幸福の怠惰」と訣別し、朝に葉巻を吸う暇のある連中を軽蔑し、同僚と飲屋のテーブルを囲むこともなく、ぎりぎりの限界まで精神を緊張させ、業績を挙げるべく、ただひたすら仕事に励んできた。それほどまでに努力したのに躓いた、ということが、ユーバーバインに大きな衝撃を与え、彼を自殺へと追いやったのであろうか。これだけでは釈然としない。「ロマンティッシュな個人主義者であるラウール・ユーバーバインは極めて底意のある仕方と惨めに破滅する。¹³⁾」と作者も後に発言していることであるが、当てつけがましく二人の婚約の日に自殺をしたということは、些細なことがきっかけとなっているにもせよ、クラウスに対する絶望が最大の要因であったことを暗示している。

トーニオ・クレーガーは「精神の眼が見るところでは、すべての行為は罪です…¹⁴⁾」と言った。この言葉はどのような意味をもっているのか。

大衆とは俗悪なものであり、欺瞞に満ちているということであろうか。そうであるとすれば、トーマス・マンは個人主義者ユーバーバインを「精神」の側の代表者にし、そのユーバーバインをして、クラウスを「高貴な使命」に生きさせようとしたのだと思われる。人間の精神の面への作者の愛着が、禁欲的な生活をしながら、ひたすら仕事に励む、この若い教師への愛着となって現われ、前に引用した『省察』におけるような発言をさせたのであろう。ただし、「仕事は困難です。(中略)しかし仕事をしない——これは地獄です。——¹⁵⁾」(S. フィッシャー宛、1906年7月15日) また、「孤独にたいする共感」ということを言うトーマス・マンが、この孤独な教師に共感と同情を懐いていたことは、頷けないことはないのであるが、そのような作者の心情は認めるとしても、この『省察』における発言の内容は、それを鵜呑みにして、この作品を鑑賞・解釈する際にそのまま当て嵌める、というわけにはいかない。というのは、この物語からは、幸福になったクラウスに対する作者の軽蔑というものが全然感じられないからである。作者はクラウスに対し、冷たく、傍観者的に突き放してはいない。クラウスは「[バロメーターの] 水銀は低気圧のときに下がるのです。高気圧のときにはありません、殿下。」(S. 256) とインマに言われて当惑してしまったり、詩のコンクールで一等をとったマルティーニとの会見で、この不健康な顔つきをした男に、詩人としての彼の生活や仕事についていろいろ聞かされるが、よく呑みこめない、というように少し頭の回転が鈍いところがあるが、マルティーニとの会見後、妹に、「彼と知り合いになったことを喜べるのかどうかわからない。というのは彼はどこか恐ろしいものをもっている。ディトリンデ とにかく断乎として私は彼が少し嫌だ。」(S. 118) とはっきり言うほど、芯のある、しかも素朴な、人間的な感情に忠実な人間なのである。クラウスの人間像はフモールをもって描かれてはいるが、そこにイロニーは籠められていない。そして哀れな最期を遂げた

ユーバーバインについてみれば、ほとんど意見らしい意見を挟まない物語の語り手に、「しかし人生は職業と業績とに帰するのではない。人生はその純粋に人間的なもろもろの要求と義務とをもっており、これらに注意を払わないことは仕事の領域での自分および他人にたいするある陽気さより以上に重い罪を意味する。」(S.117)とさせているのである。

ユーバーバインが「白い夫人」との幸福を断念したことは道徳的な行為ではある。そしてこのことは、彼が身を律した意志の強い人間であることを示している。しかし人間の自然な感情を殺し、人間同士のふれあいと完全に訣別して生きること、そして精神に異常な緊張を課してまで仕事に励み続けるという極端さには、心身ともに磨り減らす危険が潜んでいる。一歩まちがえば、たやすく奈落に落ちこむ。なかには、極めて強固な意志をもって、人間的な感情を断念して孤独の中を生き抜いていく者もいるかもしれないが、人間離れがして、血の通った人間とは思われない。生きた人間である限り、意志力には限界がある。些細な出来事をきっかけとして破滅するユーバーバインの結末はそれを示している。むしろ言えることは、『大公殿下』発表当時、作者はユーバーバインに同情を懐きつつも、冷たい精神の世界だけに生きることの非人間性、危険というものをわが身のこととして感じとっていたのではないか、ということである。それがユーバーバインをしてこのような結果に至らしめることになったのであろう、と想像される。ユーバーバインが、人間の自然・本能に逆って生き続けることができるほど精神力が強靱ではなかったということの中には、非人間的な生き方への非難が含まれている。

前にも述べたように、全体として、この物語のもつ雰囲気は明るく、また滑稽でもある。しかしその明るさ、滑稽さの中から、暗さ、悲惨さがとぎおり陰画として浮かび上がってくる。クラウドにも、破滅の恐れが全然なかったわけではない。生まれながらの不運、取り巻かれた状況、苦い体

験、これらにはデカダンスや悲慘に通じていく危険がじゅうぶん含まれていた。滑稽さの陰に悲慘をも感じさせるヨハン・アルブレヒトの最期とドロテアの晩年、そして「[もし古城でずっと過ごしていたならば、]私は耐えられず、かわいそうなママのように頭が混乱し、奇妙になってしまったでしょう。」(S. 144) というディトリンデの言葉がそれを暗示している。しかし、これは作者が附与したわけであるが、いささか鈍感で、人間としては平凡であるが、誠実であり、しかも敢然と事に当たる、というクラウスの素朴な人間性はその危険を踏みこたえた、と言える。クラウスは、与えられたものは自己の勤めとして謙虚に引き受けるが、自分の内面からの要求に従って、愚かなまでに生きた現実を求め、本来の自分、一個の人間存在を真剣になって取り戻そうとした。仮にインマを獲得することに失敗したとしても、途中で逃げ出したり、挫折したりすることはなかったであろう、という思いまで起こさせる。

クラウスとインマは、クノーベルスドルフの手助けによって、ひとまず幸福になった。二人は現実の問題に取り組んでいこうとする。しかしインマは、自分たちが人間的な生活を送ることができるのかどうか、自分たちに人間らしく生きる能力があるのかどうかに、まだ不安をもっている。「しかし私たちは、ユーパーバイン博士がいつも言っていたということですが、人々の上に立っていながら、愚かで孤独です。そして生活についてはまるでわかっていません！」(S. 383) たしかに、これには疑問が残る。二人はこれから後も、あの頭のぼけた年金生活者フィンメルゴットリーブのように、ただ役にも立たない「合図をする」だけのことになるかもしれない。しかしクラウスには希望がある。「全然[わかっていない]だって、インマ？しかし、ついに私への信頼をおまえに起こさせ、そして私を公の福祉についてのこんなにも現実的な研究へと導いたものは一体何だろう。愛というものを知っている者が、生活というものを全然知らないのか？こ

れが今後われわれの問題となるのだ——つまり高貴と愛の両方が、——厳しい幸福が。」(S. 383) クラウスの言葉には、人間らしい生き方を求める気持と同時に、生ぬるい幸福に溺れまいとする倫理的態度——これはユーパーバインの教えを汲み取っていることを示すのであろう——が窺われる。

トーマス・マンは『大公殿下』執筆に際して、カーチャに宛てた手紙を利用したとのことである。インマとカーチャにはかなり類似したところがあるのかもしれない。それは、インマを *gänschenhaft* と貶したクルト・マルテンスに宛てて、マンが「それは残念です。というのは私は妻に君の本を渡さずにおくことができませんでしたから。」¹⁶⁾ と書いていることから推察できる。しかしクラウスはどうであろうか。トーマス・マン自身、他人との共感に飢えていた。心からの愛情と信頼を寄せてくれる伴侶を求めていた。このような作者の気持がクラウスの人間像に投影されている。しかしクラウスがトーマス・マンそのものでないことは確かである。トーマス・マンはクラウスのように単純・素朴な人間ではない。カーチャとの結婚で一时有頂天になったトーマス・マンは、結婚して間もないころ、ヴィトコプ宛に次のように書き送っているのである。「良心も安らぎません。というのは事実《幸福》にたいする私の恐れが小さくないからです。そして私はなお依然として、《生》への私の献身がそもそも高度に道徳的なものであるのか、それとも一種の自墮落であるのか、疑っています。」¹⁷⁾ (1904年10月30日) このように、結婚のほとぼりが冷めるか冷めないうちに、たとえそれが道義的な観点からであるにもせよ、もう獲ち得た幸福に疑念を懐いてしまう人間が、クラウスのように「厳しい幸福」で簡単に納得するとは思われない。トーマス・マンは、後に『略伝』において、「このロマーンの形をとった喜劇の試み、これは同時に《幸福》との契約の試みを意味したのだが、(以下省略)」¹⁸⁾ ということをも言うのである。ただ、「今回もまた、自分の生活について物語った。」という当時の発言、そし

て、姿勢を崩さず、表情を変えず、片足で立ち続け、しかし内には実に優しい心をもっている玩具の兵隊、クラウスが種々の点で類似しているこの玩具の兵隊を主人公としたアンデルセンのメールヒェンについて、「いつも私はアンデルセンの『毅然とした錫の兵士』を特に好んでいました。このメールヒェンが実は私の人生の象徴なのです。』¹⁹⁾ (アグネス・E・マイヤー宛、1955年2月9日)と、晩年に書き送っていることをも考慮すれば、こう言えると思う。クラウスの人間像は、作者トーマス・マンが自分のことを象徴化し、さらにそこへ、Sehnsucht という言葉はマンがもっとも愛している言葉のようであるが、彼の憧れが反映し、理想化されたものである、と。単純素朴で実直な人間、こういう人物には、もう今さらなることができるわけではないが、求めてやまない永遠の憧憬であって、その憧憬の対象に形を与え、ひとりの理想的人物として表わしたのではなかったか。いわば、トーニオ・クレガーとハンス・ハンゼンとの融合の産物である、と解釈することも許されると思う。そうすれば、メールヒェン風の物語にしたことも、作者の夢を託したこととして頷ける。下界の活動とは隔絶した超現実的な世界、サナトリーウムを舞台にする『魔の山』も、見方によっては、近代のメールヒェンの一種とみなすことができると思われるが、そのなかで、クラウスと同じように、素直でまじめな青年ハンス・カストルプが山を降り、戦争の吹き荒ぶ凄惨な下界で、一兵卒として戦っているところが語られる最後の場面の描写には、作者の愛情に溢れた気持が率直に表出されている。クラウス・ハインリヒの場合には、自伝的なことと二重写しになっているため、フモールで包んだ表現になってしまったのであろう。

単純で素朴ということに限っていえば、これがもっともよく現われているのは、結婚に二度失敗しても、少々愚かともみえるほど朗らかさを失うことなく、没落してゆくブデンブローク家のなかで生き抜いてゆくアントー

ニエ・ブデンブローク（愛称トーニー）であり、トーニーのような逞しさはなく、むしろずっと傷つきやすい性質ではあるが、実業家になった陪臣男爵と結婚し、王女の地位を捨て、市民の生活に入り、はじめは部屋じゅう植木鉢や花台でいっぱいにして、子供が生まれると今度はそれに夢中になるという、平凡ながら幸福な生活を送っている無邪気なデイトリンデである。彼女たちは理窟ぬきに好感のもてる人間像である。トーマス・マンが現実の世界で心ひかれるのはこのような人間たちにてであろう。しかしトーマス・マンはこの単純・素朴さのなかへ無条件に降りてゆくことができない。単純な人間や生ぬるい幸福に浸りきれぬ人間たちには軽蔑の入り混った憧憬を感じるようになるのかもしれない。単純で素朴な人間たちは、現実には、愚昧であったり、俗悪な面を含んでいたりするからである。トーマス・マンが真に憧れているのは、愚昧さや、俗悪な面を取り除き、理想化された素朴な人間たちにてであろう。

ロマンティッシュで、感傷的でもある愛に至ったトーニオ・クレーガーは芸術家であることをやめはしなかった。トーニオにとって、精神の世界を捨てることはできない。この世界に住むことは彼に定められた運命である。「ユーバーバイン博士への愛着」という言葉には、トーマス・マンが精神だけの世界に生きることの非人間性を感じつつも、この世界がもつ倫理的な面には価値をおいていた、という意味も含まれているのだと思う。クラウスが天職を捨てず、自分のおかれた立場で最善を尽し、かつ幸福に溺れまいとするところには、この倫理的な面が現われている。端的に言えば、クラウスは人間らしい素朴な感情をもち、かつ倫理的な面をもっている理想的な人間として描かれてあり、そこに作者の素朴な人間への郷愁めいた憧憬と、あるべき人間の姿としての理想が籠められている、と私は見る。

そして、このトーマス・マンの憧憬と理想は、裏を返せば——こういう

ことが意識されてくるのは近代の特徴のひとつでもあるが——精神に拘束されてしまったり、また形式的な慣習に染まり、それでごんじ搦めにされて、身動きがとれず、素朴な人間性が失われつつある者（「個人的・人間的な部分への無邪気な信頼」が欠乏しているトーマス・マン自身の問題であるわけだが、）の人間性を回復しようとする気持の現われでもあろう。トーマス・マンは、実生活において、結果的には、人間の共同社会に順応した生活を送ることになった。しかしギムナージウムでは二度落第し、学校を忌み嫌い、また受け継がれてきた商会をこれからも維持していくことはとても自分にはできそうにない、という意識があったとのことである。さらに、兵役に服するが、不適格で除隊となっていることから、身体は、健康ではあれ、頑健というほどではなかったのであろう。これからのことから、トーマス・マンは、若いころ、現実生活への不適応を感じていたことが想像される。そのような作者の内面が、異常な境遇におかれている者という形で、この作品に投入されているのだと思われる。その場合、往々にして、デカダンスやニヒリズムに陥りやすい。『ブデンプロック家の人々』や『ヴェニスに死す』等から窺えるように、トーマス・マンにもデカダンスへの傾斜が内在していたことは否定し難い。しかし、トーマス・マンのもつ強靱な生命力がそれを踏みこたえさせ、自分の生きている現実生活で、人間としての生き方を回復しようとする方向へ向かわせることになった、と言えらると思う。

トーマス・マンは「『人類』——この抽象的なものと私との関係が曖昧であることは認める。しかし昔から人間は私の関心をすっかり奪った。——たとえば旅行に出かけると——人間と、そして恐らく動物もまた、私の関心を奪ったが、たとえば芸術や風景は私の関心を奪わなかった。』²¹⁾と発言している。トーマス・マンが特に人間に関心をもっていたということは、その諸作品からよく窺い知ることができる。人間への関心が後期の作品に

においてより深められ、倫理的な面を多分に含んだ人間性の問題から、その粹を取り外して、人間をありのままに観ることを試みつつ、その深淵、意識の底を流れるもの、無意識の世界へと、人間そのものの本質を求めて、人類の過去へ、源泉へと、遡っていくことになったのであろう。しかし、その際にも、トーマス・マンの心の内には、結局みずからを破滅から救うということであるが、人間の救済という倫理的な面が、最後まで付きまとって離れなかった。そのような印象を、私はトーマス・マンおよびその諸作品から受けている。

使用テキスト

Thomas Mann: Königliche Hoheit, Sonderausgabe, S. Fischer Vlg., 1970
(本文中の括弧内にページ数のみ記したものは、このテキストのページ数を示す。)

他のテキストは次のものを使用した

- Th. Mann: Werke, Taschenausgabe in 12 Bänden (MK 101-112), Fischer Bücherei, 1967
Th. Mann: Das essayistische Werk, Taschenausgabe in 8 Bänden (MK 113-120), Fischer Bücherei, 1968
Th. Mann: Briefe 1889-1936, S. Fischer Vlg., 1962 (注には Briefe I と記した。)
Th. Mann: Briefe 1948-1955 und Nachlese, S. Fischer Vlg., 1965
(注には Briefe III と記した。)

参 考 文 献

- Arthur Eloesser: Thomas Mann, sein Leben und sein Werk, S. Fischer Vlg., Berlin 1925
Martin Havenstein: Thomas Mann, der Dichter und Schriftsteller, Vlg. Wiegandt & Grieben, Berlin 1927
Inge Diersen: Untersuchungen zu Thomas Mann, Rütten & Loening, Berlin 1960
Paul Altenberg: Die Romane Thomas Manns, Hermann Gentner Vlg., Bad Homburg vor der Höhe 1961
Walter A. Berendsohn: Thomas Mann, Künstler und Kämpfer in bewegter Zeit, Vlg. Max Schmidt-Römhild, Lübeck 1965
Ulrich Dittmann: Sprachbewußtsein und Redeformen im Werk Thomas Manns, W. Kohlhammer Vlg., Stuttgart 1969
Hans Bürgin und Hans-Otto Mayer: Thomas Mann, eine Chronik seines Lebens, S. Fischer Vlg., 1965

注

- 1) Briefe I, S. 40
- 2) [Vorwort zu einer amerikanischen Ausgabe von ›Königliche Hoheit[.]。MK 119, S. 313
- 3) ›Betrachtungen eines Unpolitischen (以下 ›Betrachtungen《と略す。) MK 116, S. 71
- 4) Vgl. ›Tonio Kröger《, MK 111, S. 225
- 5) Vgl. ›Betrachtungen《, MK 116, S. 72
- 6) [Über›Königliche Hoheit[.] MK 119, S. 34
- 7) Briefe I, S. 45f.
- 8) Ibid. S. 53
- 9) Briefe III, S. 432
- 10) Briefe I, S. 51
- 11) ›Tonio Kröger《, MK 111, S. 224f.
- 12) ›Betrachtungen《 MK 116, S. 73
- 13) Ibid. S. 72
- 14) ›Tonio Kröger《, MK 111, S. 228
- 15) Briefe III, S. 451
- 16) Briefe I, S. 83
- 17) Ibid. S. 57
- 18) ›Lebensabriß《, MK 119, S. 235
- 19) Briefe III, S. 375
- 20) Vgl. Briefe I, S. 57 トーマス・マンは、1904年9月末、カーチャに宛てた手紙に、次のように書いている。「(前略) 憧憬！私がどんなにこの言葉を楽しんでいるかをあなたは知らない！これは私の気に入りの言葉、私の神聖な言葉、私の呪文、世界の秘密を解く私の鍵なのです…」
- 21) ›Betrachtungen《 MK 116, S. 334

Über Thomas Manns „Königliche Hoheit“

Tadao Kamata

Man kann sagen, die „Königliche Hoheit“ sei komisch, märchenhaft und auch oberflächlich. Freilich ist dieses Werk nur scheinbar so gestaltet, denn genau betrachtet, hat es Beziehungen auf das Innere seines Schöpfers, auf Thomas Mann. Der Verfasser dieses Aufsatzes glaubt, daß das Innere als Gemüt und ernsthafte Haltung des Dichters für das Problem der Menschlichkeit in diesem Werk mit eingeschlossen ist. Daher wird hier versucht, nach der Auffassung Th. Manns von der Menschlichkeit zu forschen.

Ein einsamer Hilfslehrer, Dr. Überbein, der menschlichem

Gefühl abgesagt hatte, ging elend zugrunde. Dagegen wurde Klaus Heinrich, der menschliches, naives Gefühl hochgeschätzt hatte, wenn er sich auch dessen am Anfang noch unbewußt war, glücklich. Unter diesem Schluß ist nicht der ironische, sondern der offene Ausdruck des damaligen Gemüts von Th. Mann zu verstehen. Der Held, Klaus Heinrich, ist mittelmäßig begabt, etwas stumpfsinnig, aber er ist gütig, redlich und standhaft. Er ist nicht nur einfältig und naiv, sondern er tut auch voll und ganz seine Pflicht. Kurz gesagt, er erscheint als eine Art idealer Mensch. Solche Klaus-Gestalt hat etwas gemein mit ihrem Schöpfer, aber sie ist nicht der Schöpfer selbst. Diese Gestalt bedeutet vielmehr, daß sich die Sehnsucht und das Ideal des Dichters, d.h. die Sehnsucht nach naiven Menschen und das Ideal, wie der Mensch sein soll, körperlich und als Person, als Klaus Heinrich darstellte. Und hinter dieser Sehnsucht und diesem Ideal könnte sich zugleich Th. Manns Auffassung verbergen, die ursprüngliche Menschlichkeit der Menschen, die sich nun in ungewöhnlichem Zustand befinden, wiederherzustellen. Solch eine moralische Haltung scheint für den Verfasser den Werken von Thomas Mann eigentümlich zu sein.